慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代アメリカ倫理学
Sub Title	Present-day American moral philosophy
Author	小泉, 仰(Koizumi, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1962
Jtitle	哲學 No.42 (1962. 9) ,p.45- 71
JaLC DOI	
Abstract	I have tried in this paper, first, to describe main trends of present-day American moral philosophy and, second, to give a list of the important books and articles written by those philosophers who are representatives of the trends. I adopt the categories which are coined by Professor William K. Frankena of the University of Michigan and are ordinarily made use of in American philosophy: normative ethics and meta-ethics. Meta-ethics is still further subdivided into four: ethical naturalism, anti-descriptivism, intuitionism, and others. The list of books and articles follows the order of the categories mentioned above. I choose the books which are the most important and are very often debated by many philosophers in the field of normative ethics and meta-ethics, and the articles which I find important in the following magazines from 1930 to January 1962:- Ethics, Journal of Philosophy, Mind, Philosophical Quarterly, Philosophical Review, Philosophical Studies, Philosophy and Phenomenological Research.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000042-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代アメリカ倫理学

小　泉　　仰

わたくしは，この小論において，第1に，アメリカにおける倫理学のおもな傾向を，かいつまんで眺め，第2に，その傾向についてのおもだつた文献をあげてみたいと思う．

さて，これら二つの問題に入るまえに，アメリカの倫理学において，倫理学の特定の領域をさすために，特別に使われている用語の説明をすることにしよう．この説明によつて，わたくしは，アメリカの倫理学の一般的傾向が，どの領域の問題に関心をもつているか，またどの領域に新らしくむかおうとしているかということを，はつきりさせたいためである．倫理学をとりあつかつた著書のうちで，われわれはつぎのような用語を見いだす場合が多い．すなわち，(1) morals; (2) mores; (3) normative ethics—reflective moral judgments; (4) meta-ethics—theories about meaning of reflective moral judgments; (5) moral psychology.

さて，(1)の morals というのは，個々の実際におこなわれた行為や実践を示す語であり，共同体のなかで見られる特殊の行為をさしている語である．このような個別的行為は，おそらく，心理学や社会学または歴史学の対象になるかもしれないが，アメリカの倫理学は，これをとり扱つていない．

第二の mores は言うまでもなく，習俗とか慣習的道徳といわれるもの

であり，共同体において成立しているおもだつた道徳法則であるとか，道徳規範を示すものである．これは，文化人類学者や社会学者の研究対象であり，第一の領域とともに，いわば Sein の領域の研究であつて，アメリカの倫理学にとつては，例証として役だつほかには，とくに倫理学の主題としてとり扱われていないのが実状である．

第三の normative ethics と，第四の meta-ethics とは，ミシガン大学教授ウイリアム・K・フランキナが名づけた区別であり，アメリカの倫理学では，一般的にうけ入れられているものである．前者は，「何をなすべきか」「何が正しいのか」「なぜこうしなければならないのか」というような実践的な道徳的問題に，ひとがぶつかつたときに，解答として与えられるはずの体系をさしている．たとえば，自分の利益を犠牲にして友人を救うか，それとも，自分の利益のために友人をすてさるかどうか，という実践的な問題にひとが直面したとき，「わたくしは友人をすてさるわけにいかない．なぜならば，自分の良心にそむくことはとうていできないからだ」と判断したとすると，この人は，この実践的問題を解決する倫理体系をもつているといわれる．この体系が normative ethics なのである．この規範倫理学の領域には，数多くの体系が成立しているが，いずれの体系にせよ，原理と結論との関係を示すことができるという意味で，体系的である可能性がある．たとえば，快楽を善と考える快楽主義者は，快楽＝善という価値論をもつし，さらに，自己の快楽（善）を最大にすることを義務とみなすならば，かれは，エゴイズムの原理という責務論をもつことになる．これらの原理によつて，かれの行為の決定は，なされることになる．このように，規範倫理学の領域において，どんな体系をえらぶにせよ，ひとが一つの体系をえらんだ場合，かれは，行為決定の原理と結論とを指摘できるという可能性がある．第二に，この領域の特色は，この行為の決定，つまり道徳的判断が判断として反省的になされていることである．つまり，

熟慮の過程において，反省的におこなわれるということである．第三の特色をつけ加えるならば，この判断をくだす人は，その判断の内容について，特殊の態度をもつているということである．その特殊の態度とは，判断の内容に責任をもち，それにふみきる(コミット)態度である．

さて，このような規範倫理学は，倫理学の出発点として，ソクラテスのむかしから研究されてきたものである．しかし，ソクラテスの場合と同様に，何をするのが正しいかとか，何が義務かという実践的問題は，しばしば解決のむずかしいものであつた．それゆえ，最初はこのような実践的問題に解決を与えようとしたソクラテスが，しだいに，「正しい」という意味は何かという異つた問いかけを試みるようになつていつたように，現代の倫理学者も，規範倫理学的問いかけから，その問いかけのなかで使われている倫理語の意味の究明に，かれらの問いかけを変えていくのである．このような「正しさ」の意味の問題，「善」の意味の問題を問題としようとする倫理学は，フランキナによつて，meta-ethics と呼ばれる領域である．アリストテレスが物理学のあとで存在論を研究するという意味で，meta-physics と呼んだとおなじように，フランキナも，規範倫理学のあとでそこで使用されている倫理的判断の意味の研究をするために，meta-ethics と呼んだものである．この normative ethics と meta-ethics とは，ちようど科学と科学哲学の相異とパラレルであるとフランキナは指摘している．(W.K. Frankena, Seminar in Ethics, Fall Semester, 1959, Univ. of Michigan) すなわち，科学哲学は，科学においてなされる科学的判断についての意味を研究するが，けつして科学そのものには貢献するものではないし，またそれに影響をおよぼすことはできない．同様に，メタ倫理学も．規範倫理学の判断の意味を研究するが，規範倫理学へなんらの貢献もしないのである．

それゆえ，メタ倫理学での特色は，第一にその倫理学が規範的判断の意

味についてのメタ倫理学的反省的判断から構成されているということである．第二は，それゆえ，規範的判断の内容については，すこしも判断者がふみきつていないということである．第三には，ここでも，道徳的判断のなかの「善」の意味の分析を中心とした価値論と，「正または義務」の意味の分析を中心とした責務論という体系を構成できるということである．

さて，メタ倫理学のなかで，二つのレベルを考えることができるように思われる．第一のレベルは，倫理的判断中の倫理的概念「善」，「正」，などがどういう意味をもつかという問いかけのレベルである．第二には，倫理的概念を分析していつた結果，これらの概念が，その使用されるコンテクストに応じて，意味をかえていくことが判明したので，まずこのコンテクストを研究しようとする研究のレベルである．たとえば，規範的判断 'He is a moral man' のなかの 'moral' という語の意味を問いかけるのが，第一の段階のメタ倫理学である．その 'moral' の語は，かれの行為の正，不正と関係しているのであつて，この語の対句をあげるとすれば，'immoral' であろう．ところが，'He is a moral man' is a moral judgment' というメタ倫理学的判断においては，まえにある 'moral' とあとにある 'moral' とは，あきらかに意味をことにしている．前者が第一段階のメタ倫理学でとり扱うものであるとすれば，後者は第二段階のメタ倫理学でとり扱わなくてはならない．すなわち，後者の 'moral' は，もはや 'immoral' と対句になるものではない．むしろ，'He is a moral man' という規範的判断が，非道徳的判断の領域と区別されて，道徳という制度のなかに属していることを，意味するものである．たとえば，上述の規範的判断が，科学でもなければ法律でもない，まさにそれらと対立する道徳という広いコンテクストのなかに属することが，意味されているのである．それゆえ．第二段階のメタ倫理学では，制度としての道徳全体の体系が意識されている．さらにまた，第一段階のメタ倫理学で

は，とり扱わなかつた規範的判断とそのコンテクストとの関係が，意識的に問題としてとりあげられるはずである．この第二段階のメタ倫理学から，「道徳性の本性は何か」「なにゆえ道徳的であるべきか」という問題が論じられるのである．

さて，最後の moral psychology は，行為者の動機を研究する領域である．すなわち，どんな原因が行為者を動かして行為させるか，という問題が追求される．ところが，これまで，この領域は，心理学者，社会心理学者，教育学者らによつて研究されてきたけれども，アメリカの倫理学者によつては，とくにとり扱われていなかつた．しかし規範倫理学が，人間の行為を追求して，その手段の問題に入り，さらには，どのようにして行為者が道徳的行為へとふみきる性格を身につけうるか，という問題にまでふれてくると，この道徳心理学の領域に入ることになるであろう．これは，いわば，道徳教育の研究領域であろう．最近において，二三の倫理学者は，この領域に関心をもつようになつてきている（W. Frankena, Towards A Philosophy of Moral Education, Harvard Educational Review, April 28, 1958）．ところで，この moral, psychology は，規範的要求とは別に，行為の動機（モーティヴェイシヨン）の概念の分析とか，意志の自由と決定論の分析の領域とみなされて，メタ倫理学の立場から議論されることができる．この意味の moral psychology は，メアリ・ウォーノックによれば，主としてイギリスの議論のなかでとりあつかわれている．（Mary Warnock, Ethics since 1900, O.U.P., 1960）しかし，この問題は，アメリカにおいても，ある人々が議論に参加している問題である．そこで，われわれはこの二つの moral psychology を区別して，a) moral psychology as a branch of meta-ethics と，b) moral psychology as science の二つにわけておくことができる． a) は，第四のメタ倫理学にふくまれるものとして，とり扱えるが， b) は，むしろ社会心理学や心理学でとり扱われ

る領域であるとしてよい.

前者の a) については，この論文ではとり扱わずに，ここで，かんたんに論文と著作をあげておくだけにする.

a) moral psychology as a branch of meta-ethics

British writers :-

Mary Warnack, Ethics since 1900, Home Univ. Libr., O.U.P., 1960.

G. E. Moore, Ethics, Home Univ. Libr., O.U.P., 1912.

H. L. A. Hart & A.M. Honoré, Causation in the Law, Clarendon, O. V. P., 1959.

H. L. A. Hart, The Concept of Law, Clarendon Law Series, 1961.

P. Nowsll-Smith, Ethics, Penguin, 1954.

J. L. Austin, Jfs and Cans, Philosophical Papers, O.U.P., 1961.

Gilbert Rile, The Concept of Mind, Hutchmson's Univ. Libr., 1949,

L. Wittgenstein, Philosophical Investigations, Blackwell, O. U. P. 1953.

American writers :-

C. L. Stevenson, Ethics and Language, Yale U.P., 1944.

S. Hook (ed.), Determinism and Freedom, New York Univ. Press, 1958.

A. I. Melden, Free Action, Rontledge & Kegan Paul, 1961.

さて，アメリカの倫理学は，主として，これまで述べてきた五つの領域のうち，第三の規範倫理学と，第四のメタ倫理学をとり扱つている．とくに，第四の領域はほとんどすべての倫理学者が関心を示している領域であ

る，そこで，最初に規範倫理学の傾向をのべ，つぎにメタ倫理学の傾向を述べることにしよう．

(一)

さて，規範倫理学の領域は，とくに最近のアメリカにおけるキリスト教の復興とともに，キリスト教神学者たちの活躍する舞台となつている．リッチヤード・ニーバーによれば，現代キリスト教思想家の問題は二つある．一つは内的な，心にかかわる問題であり，他は外的な，社会にかかわる問題である．十九世紀においては，後者が主として強調され，この現実の社会を幸福な，戦争のない社会にすること，つまり，この世において神の国を実現することが，キリスト教倫理の中心問題であつた．これは，社会的福音（ゴスペル）とか自由主義キリスト教（リベラル・クリスチアニテイ）と呼ばれた運動である．ところが，二十世紀は，この希望を挫折させてしまう事実を，つぎつぎとわれわれにつきつけてきたのである．この事実が，キリスト教倫理にとつて大きな転換をせまることになつた．キリスト者は，社会にかかわる問題にふかく関心をもちながらも，心にかかわる問題，つまり人間のもつ罪悪の再認識の問題にたちかえることになつた．そして心の問題と社会の問題とは，相対立するものではなくて，相補うべきものとして現代のキリスト教神学者のまえにあらわれたのである．この課題をまえにして，かれらは，あるいはトマス・アクイナス，スアレスにもどり，あるいは，パウロ，アウグスチヌス，ルッター，キエルケゴールにかえつた．前者が，自然法思想を土台とするカトリック倫理を説くジャック・マリタン，エチアンヌ・ジルソンである．ジルソンは，アメリカに住んではいないが，地続きになつているカナダのトロント大学の Pontifical Institute of Medieval Studies の所長として活躍し，アメリカのカソリック倫理学への影響は大きいものである．

一方，後者はプロテスタント神学者のとる立場であり，ラインホルト・

ニーバーはその代表者である．かれは，社会的福音の伝統にそだちながら，その自由主義と訣別して，ポール・ティリックとともに，ネオ・オーソドクシと言われる立場をうちたてた．すなわち，集団的人間のもつ意志と，個人の意志との間のディレンマのうちに，人間全体が共有する罪の構造をさぐろうとしたのであつた．ニーバーのほかに，アメリカ人ではないが，おなじくアメリカのプロテスタント倫理学に影響を与えているものとして，エミール・ブルンナをあげなければならない．かれらは，アメリカの講壇哲学に対しては，あまり影響を与えていないが，エリセオ・ヴィヴアスなどとともに，アメリカの実存主義的思想を代表している．かれらは，教会関係を通じて規範倫理学の領域で一般民衆に大きな影響を与えている．

他方，神学者以外の倫理学者たちは，一般的に言つて，功利論的であるか，そうでなければ，部分的に功利論的である．現代の倫理学者は，規範倫理学についての著書を発表せず，むしろ，もつぱらメタ倫理学の著書をあらわしているものが多い．かれらは，メタ倫理学と規範倫理学とがまつたく別のものであると考えている．しかし，規範倫理学の立場としては，かれらは功利論にくみしているのである．J. デウイ，F·C·シャープ，R·B· ペリなどのふるい年代に属している倫理学者たちが，わずかに規範倫理学に関する著書を発表してきたにすぎない．

(二)

さて，第二領域のメタ倫理学は，現代のアメリカの大部分の倫理学者が関心をもつている領域である．この領域については，ethical naturalism, anti-descriptirism, intuitionism などという概念によつて，学派を分類することがふつうおこなわれている．これらの概念は，人によつてことなる意味を与えられたり，一人の倫理学者が同時に naturalist であり，anti-

descriptirist でありうるので，十分な区分概念ではないが，便宜上，この名称を採用することにしよう．そして，これら三つの派に属さないものは，その他という項目をもうけ，そのなかに分類しておくことにする．

(1) ethical naturalism

まずこの ethical naturalism という概念を説明しなければならない．これは，G・E・ムーアが倫理学原理(プリンキピア・エチカ)で使つた概念であるが，倫理語が経験的概念（満足とか快楽）とか，その他の叙述的概念（たとえば，完全というような形而上学的概念）によつて，定義されるとする立場をさしている．ムーアにとつては，スペンサーの進化論的倫理も，進化を善とする点で自然主義であり，キリスト教神学も，善を形而上学的に定義するゆえに，自然主義であると考えられたのである．この自然主義は，イギリスにおいては，ムーアの「自然主義的誤謬批判(ナチユラリスチック・フアラシ)」によつて，まつたくおとろえてしまつたのであつた．

ところが，アメリカにおいては，ムーアの批判にまつたく影響されず，自然主義はきわめて堅実な発展をとげてきたのである．この自然主義にも，前期と後期にわけて考えることができる．前期の系列には，J・デゥイ，D・H・パーカー，S・C・ペッパー，C・I・ルイス，R・B・ペリをかぞえることができるし，後期の系列には，R・B・ブラント，P・B・ライス，P・エドワーズ，M・シンガーをあげることができる．

前者の系列は，すでに述べたように，ムーアの批判に影響されることなく発展してきた，プラグマティストをふくむ一団である．ところが，アメリカ，イギリスに共通して，1930年代から40年代に展開された反叙述主義(アンタイ・デイスクリプテイヴイズム)の批判をうけると，急にこの一団の自然主義は，おとろえを示しはじめた．いま，この前期反叙述主義の批判を検討してみることにしよう．

反叙述主義とは，倫理語（善悪，正不正）が叙述的な意味以上の非認識的意味(ノン・コグニテイヴ・ミーニング)を持つという主張であり，ムーアの自然主義批判の変形と見られる

ものである．この叙述的意味以外の非認識的意味とは，反叙述主義の項目でくわしく述べるが，情緒的意味（エモーティヴ・ミーニング）といわれる，話者の感情をあらわしたり，聞手の態度を変えようとする機能をさしているのである．この立場の人々は，倫理的自然主義が倫理語について叙述的な意味とか経験的意味とかで定義できると考える誤りをおかしているのだと言うのである．ところが，ムーアにしても，これら反叙述主義者にしても，自然主義の立場を根本から誤解しているように見える．なぜならば，デゥイをはじめとして，ペリらの自然主義は，反叙述主義者のとり扱う自然主義とまつたく異つているからである．この相異は，経験という概念についてのアメリカとイギリスの土壌で考えられた内容の相異と，パラレルであるように思われる．たとえば，イギリスにおける経験とは，ヒュームからムーアにいたるまでの英国経験論において考えられた経験であり，対象からわれわれの感覚に与えられたもの，つまり sense-data という受動的な印象からなりたつものである．ところが，アメリカの，とくにプラグマティズムにおける経験は，けつしてこのような感覚への受動的印刻ではない．むしろ，それは，行為のうちに，対象に対して積極的に働きかけ，これを改革していき，未来を予示しながらすすむ動的な経験を含むものである．それゆえ，いま，倫理語をイギリス経験論の意味の経験によつて，定義したとすれば，反叙述主義者の言う批判があてはまるであろうが，この場合の自然主義は，自然を受動的に報告して記述するという Reportive Naturalism 報告的自然主義にすぎないものとなるであろう．ところが，プラグマチズムの意味する経験によつて，倫理語を定義するならば，反叙述主義の批判は，あてはまらないと言わなくてはならない．なぜならば，倫理語を定義する経験的概念は，プラグマチズムによれば，受動的叙述的機能だけではなく，反叙述主義者の言う non-cognitive の要素をも，すでにふくんでいるからである．

さらに，反叙述主義の批判は，もう一つの問題点をもつている．それは，つねに日常言語の用法に注目し，その用法にてらし合わせて，ものごとを判定しようとするやり方にある．たとえば，自然主義の批判をするのに，典型的な形を示すと，つぎのようになる．

(1) 'This is good' means 'This is pleasant' in ordinary language.

(2) 'This pleasant thing is not good' is meaningful in ordinary language.

(3) 'This pleasant thing is not pleasant.'

すなわち．(1)自然主義は日常言語のうちで 'good' を 'pleasant' で定義する．ところが，(2)の言い方も日常言語のなかで有意味である．とすれば，(3)のような奇妙な，日常言語の用法に反する結論がうまれてしまう．それゆえ，(1)の自然主義の定義が誤つているのだという批判なのである．そこで，かれらの批判の根拠は，日常言語の用法であることになろう．

ところが，自然主義には，日常言語の用法と無関係に，倫理語を特定の叙述語（快）で定義することを提案する立場もある．R・B・ペリや，C・S・ペッパーのような提案的自然主義には，それゆえ，反叙述主義批判は，あてはまらないと言わなければならない．なぜならば，提案として定義する以上，'This pleasant thing is not good' ということを認めないからである．

このように見てくれば，前期自然主義は，反叙述主義の批判があてはまらないのに，その批判によつて，事実上，思想運動としておとろえていつたということになる．その衰頽は，上述の反叙述主義のみせかけの批判の適中によつてか，それとも，何らかの自然主義のもつ内部の原因から，はじまつたものであろう．前者の原因は，現実のものと考えられるが，後者については，これまで十分に論議されていない．

それゆえ，反叙述主義の批判の弱点をついて，自然主義の復興をなしと

げ，これを現代のアメリカ倫理学の一つの主流の地位におしあげた人々が，P・B・ライス，R・B・ブラント，P・エドワーズ（エドワーズの考えの一部は情緒主義的である）らである．

かれらに共通した考え方の基点として，反叙述主義の批判を十分ふまえていることである．しかし，かれらは，日常言語の用法の研究にのみ頭をつつこんでいた反叙述主義者の態度にあきたらない．かれらは，倫理的原理というものが，単に態度の表出とか，命令の表示とかの機能につきるものではないと主張する．かれらにとつては倫理的原理は，広いコンテクストのなかに基礎をおいたものであり，そのコンテクストの土台のうえで，人間性の事実を示すものとして，認識的（コグニティヴ）であり，われわれの認めざるを得ない根拠とみなすのである．つまり，コンテクストの土台において，われわれが解釈することのできるものであり，単なる非認識的機能につきるものではなかつたのである．それゆえ，P・B・ライスにおいても，R・B・ブラントにおいても，道徳を道徳たらしめるコンテクストの研究が中心の課題になつてきている．この意味で，かれらは，メタ倫理学の第二の段階の研究に入つていると言えるのである．かくして，道徳的行為は，広いコンテクストのなかにおいて，その根拠や理由を理性的に，認識的に，探求がきるものであり，それゆえ，正当化することのできるものであるという倫理的自然主義の立場をとるのである．

さて，前期自然主義と後期自然主義との間には，右にふれたように，メタ倫理学について，第一段階と第二段階のレベルの相異が見られる．前者においては，たとえば，ペリのように，倫理的判断の定義という第一段階の分析に終始しているが，R・B・ブラントや，P・B・ライスになると，それ以上にその判断とコンテクストとの間の正当化の関係が，重要な研究対象になつているからである．さらに，前期のプラグマチズムの流れは，とくに，P・B・ライスの体系のように，後期自然主義のなかにも，意識的

にとり入れられていることを，みのがしてはならない．

(2) anti-descriptirism (non-cognitivism)

反叙述主義については，すでにある程度，述べてきたのであるが，この運動は，1920年以来，あらわれてきたものである．それは，倫理的概念には叙述的用法以外の用法があるという考え方である．この運動にも前期と後期とにわけることができる．前期は，C・L・スチーヴンソンや，A・J・エイヤが中心になつて主張した情緒主義（エモーティヴィズム）の立場であり，後者は，これを批判した立場のD・H・エイクンやA・I・メルデン，J・ロールズ，P・エドワーズらである．

前期を説明するのに，C・L・スチーヴンソンをとりあげよう．スチーヴンソンの考え方のなかにも，かれの主著 Ethics and Language に述べられている考え方と，現在の考え方との相異があるが，根本的な相異はない．まず，まえの考え方を述べると，倫理的判断の‘This is good’を分析して，承認の部分‘I approve of it’を叙述的部分とし，命令の部分‘do so as well’という聞手の態度を変える機能を，情緒的（エモーティヴ）と呼んだのである．この考え方は，情緒主義と呼ばれる．最近においては，かれはこれを修正し，上述の判断を，1) expresses the speaker's attitude, 2) tends to move the hearer to behave, 3) includes what else is suggested の三つに分析する．そして，1）と 2）とが情緒的意味であり，3）のみを叙述的意味としている．かれは，R・M・ヘェアの批判をうけてからこのような修正におよんだものと思われるが（R.M. Hare, Geach: Good and Evil, Analysis, April 1957）根本的性格には変化はない．すなわち，かれは，倫理的判断を第一段階のメタ倫理学の立場から分析していることと，ついで，かれの情緒的意味は，命令的であり，態度の変容を要求する機能であるからである．

このスチーヴンソンの情緒主義は，後期の倫理的自然主義者のP・B・

ライスらや，また後期の反叙述主義者らによつて批判されてから，最近では下火になつてきている．

さて，A・I・メルデン，J・ロールズ，H・D・エイクン，J・ラッドらの後期の反叙述主義者の論点は，イギリスのオックスフォード学派（R・M・ヘエア，P・ノエルスミス，S・E・トウールミン）と共通しているのであるが，倫理的概念のうちに，情緒的性格ではつきることのできない複雑な機能を見いだそうとするものである．このことは，スチーヴンソンが単純なケースについての倫理的判断を分析していたのに対して，さらに一そうひろいコンテクストのなかで，判断の構造を研究しようとする立場である．このことは，かれらがいわばメタ倫理学の第二段階の研究に入つていることを示している．つまり，コンテクストごとに，ことなる判断の機能を見るために，コンテクストと判断との構造的関係を研究しようとする動きを示しているのである．そして，このコンテクストのなかで，倫理的判断は，commending, prescribing, ascribing などの複雑な反叙述的機能をもつだけではなく，さらに，理性的に判断を支持しうる理由をも，持つことができると考えられている．それゆえ，すべての理由がよい理由ではなく，コンテクストのなかで，特別の規則（道徳法則）にしたがう理由だけがよい理由と呼ばれることになる．この点で，後期反叙述主義は，前期スチーヴンソンの非理性主義に対してよりは，後期倫理的自然主義に，より一そう接近していると言つてよいのである．さらに，このようなよい理由のうちには，事実的理由も数え入れられており，この点でも，倫理的自然主義との区別があいまいになりつつある．

(3) intuitionism

つぎに直観主義にかんたんにふれることにしよう．アメリカの倫理学においては，直観主義はそれほど強力ではないと言われるが，C・A・ペイリス，L・ガーヴィン，E・W・ホール，E・M・アダムスらがこれに属し

ている．かれらに共通する性格をあげてみれば，つぎのとおりである．

第一に，かれらは，‘good’‘ought’‘value’などの語が，実在の独自で定言的な特色を示しており，しかも，その指示の仕方に直観が，重要な働きをすると考えるのである．第二に，この価値は，性質（クオリティ）でもなければ，関係でもない．non-natural unique feature of reality であり他のものに還元できないものであるとしている．それは，基本的な事実としてみとめるのである．しかし，一方，かれらは，ヨーロッパの直観主義者と異なつて，分析的方法を使用しながら，直観主義を擁護している点，アメリカ特有の性格をもつているのである．また，この派のなかでも，マンデル・バウムは，M・シェーラー，N・ハルトマンの影響をうけて，現象学的立場から，独自の直観論を展開している数すくない一人である．

(4) others

以上の学派に部分的に属しながら，しかも，決定的に一学派に属するものと言えない立場の人々もいる．たとえば，前期倫理的自然主義に所属するものとしておいたC・I・ルイスは，価値に関しては，経験的概念によつて定義できると考える自然主義の立場をとるのであるが，かれの道徳的原理は，経験的でもなければ，カント的な先天的綜合判断の性格をもつものとも言えない．それゆえ，かれを，この点に関して，どの学派に所属させるかは，決定できないものである．おなじく，プラグマチズムの流れをくむM・ホワイトも同様である．また，idealism について一言すれば，それはアメリカの少数派中の少数派であり，B・ブランシャードによつて代表されるにすぎない．

一方，英語世界において展開されたメタ倫理学の成果を，英語とはちがつたコンテクストのなかでの道徳性の追求に応用しようという考え方も，最近，あらわれてきた．この立場は，J・ラッドによつて記述倫理学と呼ばれる立場である．この試みは，倫理学者と社会科学者の協力によつて，

なしうるものである．たとえば，J・ラッドは，C・クラックホーンの協力をうけて，ネバホインディアンの道徳体系を研究し，R・B・ブラントは，数人の文化人類学者の協力の下にホピインディアンの道徳体系を研究している．

この記述倫理学は，クロス・カルチュラルな研究であるが，その目的は，記述であり，その方法は科学的と言われている．それは，基本概念の分析にもとづいて informants の一観念体系としての倫理体系を記述することである．それゆえ，メタ倫理学的研究とともに，文化人類学的アプローチを必要とするものである．記述倫理学は文化人類学に対して相補的な関係をもつている．いまこの点を，人間の観念体系（倫理体系）と実際の行動との関係から，考察してみよう．この関係はつぎの三つの様式が考えられる．

(1) 人の倫理体系は，理想とか願望にすぎず，行動にまつたく影響しない．このときには体系はうその体系となる．

(2) 人の倫理体系が，たまたま行動にあらわれないが，それを違反することによつて，人は苛責の念をもつ場合である．この場合の体系は，かくれた体系と言えよう．

(3) 人の倫理体系が行動を決定している場合である．

以上の三様式のうちで，行動観察を主とする文化人類学は，(1)と(3)の場合をつきとめうるが，(2)の場合を，見のがす危険がある．記述倫理学は(1)(2)(3)の三つの場合を叙述することによつて，文化人類学と相補的な関係に入るのである．

さらに，メタ倫理学に対しては，クロス・カルチュラルの研究によつて，その結論を修正したり，知識をつけ加えるであろう．この記述倫理学は，コロラド大学を中心として，研究がつづけられていると言うことである．

(三)

以上において，アメリカにおける現代倫理学の主な傾向を述べてきた．そこで，最後にこれらの傾向を示す論文，著書を指摘することにしよう．その指摘の順序は，これまで述べてきた小論の順序に従うことにする．すなわち，

(A) ethics in general in America

(B) normative ethics

a) Christian ethics

b) non-Christian ethics

(C) meta-ethics

(1) ethical naturalism

1 a) ethical naturalism (i)

1 b) ethical naturalism (ii)

(2) anti-descriptirism

2 a) anti-descriptirism (i)

2 b) anti-descriptirism (ii)

(3) intuitionism

(4) others

論文は，1930年より1962年1月までの Journal of Philosophy, Philosophical Review, Philosophical Quarterly, Philosophical Studies, Mind, Philosophy and Phenomenological Research, Ethics などにのつたものを主としてとりあげた．著書は，1961年までのものを含ませるように努力した．論文については，日本におけるアメリカ倫理学関係の研究論文を指摘したかつたが，準備の不足のために，この論文においては，これをなすことができなかつたことをつけ加えておく．

A) ethics in general in America

T.E. Hill, Contemporary Ethical Theories, Macmillan; 1957.

E.W. Hall, Pratical Reason and the Deadlock in Ethics, Mind, 1955.

M.G. White, Social Thought in America, Beacon Press, 1957 edition.

M.G. White, Toward Reunion in Philosophy, Harvard Univ. Press, 1956.

W.K. Frankena, Moral Philosophy at mid Century, Phil. Rev, 1951.

W.K Frankena, Moral Philosophy in America, in Encyc. of Morals, ed. by V. Ferm, 1956.

W.K. Frankena, Seminar in Ethics, Lecture Note, Fall Semester, 1959; Ethical Analysis, Lecture Note, Summer Session, 1960; Seminar in Ethics, Lecture Note, Spring Semester, 1961, University of Michigan.

S.C. Pepper, Breif History of General Theory of Value, in A History of Philosophical Systems, ed. by V. Ferm.

R.B. Brandt, Value and Obligation, Harcourt, Brace & World, 1961.

B) normative ethics:-

a) Christian ethics:-

Waldo Beach & H.R. Niebuhr, Christian Ethics, The Ronald Press Co. N. Y., 1955.

Jack Maritain, Science and Wisdom, Scribner's Sons, 1940.

——, True Humanism, C. Scribner's Sons, 1938.

——, We Have Been Friends Together, N. Y., 1942.

——, The Rights of Man and Natural Law, C. Scribner's Sons, 1943.

——, Adventures in Grace, N.Y., 1945.

——, Man and the State, Chicago, 1953.

Etienne Gilson, Moral Values and the Moral Life, St. Louis and London, Herder Book Co., 1931.

——, The Unity of Philosophical Experience, C. Scribner's Sons, 1937.

——, The Spirit of Medieval Philosophy, C. Scribner's Sons, 1940.

——, God and Philosophy, Yale, Univ., 1941.

——, Being and Some Philosophers, Pontifical Institute of Medieval Studies, 1949.

——, History of Christian Philosophy in the Middle Ages, Random House, 1955.

——, The Christian Philosophy of S.T. Aquinas, Random House, 1956.

——, Elements of Christian Philosophy, Doubleday, 1960.

Reinholt Niebuhr, Moral Man and Immoral Society, C. Scribner's Sons, 1932.

——, Reflections on the End of an Era, C. Scribner's Sons, 1934.

——, An Interpretation of Christian Ethics, Harper & Brothers, 1935.

——, The Nature and Destiny of Man, Scribner's Sons, 1943.

Laurence Sears, Niebuhr's Moral Man & Immoral Society, J. of Phil. 1933, Aug. 17, No. 17.

Emil Brunner, The Divine Imperative, Macmillan Co., 1937.

——, Christianity and Civilization, Nisbet, 1948.

Eliseo Vivas, Art, Morals and Propaganda, Ethics, 1935, Oct., No. 1., XLVI.

——, Forces in Empirical Ethics, Ethics, 1938, Oct., No. 1.

——, Ethical Empiricism and Moral Heteronomy, Phil. Rev., 1940.

——, Julian Huxley's Evolutionary Ethics, Ethics, 1948, Apr., No. 4.

——, The Moral Life and the Ethical Life, Univ. of Chicago, 1950.

Review:-

B. Blanshard, E. Vivas's The Moral Life & The Ethical Life, The Phil. Q., 1951.

G.W. Cunningham, Vivas's The Moral Life & the Ethical Life, Ethics, 1952, April, No. 3.

A.I. Melden, Vivas's The Moral Life & The Ethical Life, Phil. Rev., 1952.

Sellars, On Vivas's The Moral Life & The Ethical Life, Phil. & Phen. Rs., Vol. 12., 1952.

b) non-Christian ethics:-

J. Dewey, see the section of ethical naturalism.

R.B. Perry, see the section of ethical naturalism.

F.C. Sharp, see the section of ethical naturalism.

C) meta-ethics

(1) ethical naturalism

1a) ethical naturalism (i)

John Dewey, Human Nature and Conduct, Carlton House, 1922.

——, The Quest for Certainty, Milton, Balch & Co., 1929.

——, A Common Faith, Yale Univ. Press, 1934.

——, Dewey & Tufts, Ethics, Henry Holt & Co., 1938.

——, Intelligence in the Modern World, Modern Libr., 1939.

——, Theory of Valuation, International Encyclopedia of Unified Science, 1939.

——, Ethical Subject-Matter and Language, J. of Phil., Dec. 20, 1945, No. 26.

——, Problems of Men, Philosophical Library, 1946.

——, The Field of "Value", Ray Lepley's Value: Co-operative Enquiry, Columbia Univ. Press, 1949.

——, Reconstruction in Philosophy, A Mentor Book, enlarged ed., 1950.

Review:-

F.C.S. Schiller, The Quest for Certainty, Mind, 1930, July.

——, Essays in Honor of J. Dewey, Mind, 1930, Oct.

——, J. Dewey: Individualism, Old & New, Mind, 1932, Jan.

——, J. Dewey: A Common Faith, Mind; 1935, July.

E.M. Manasse, Moral Principles and Alternatives in M. Weber & J. Dewey(1), J. of Phil., 1944, Jan. 20, No. 2.

——, .., J. of Phil., 1944, Feb. 3, No. 3.

D.H. Parker: Dewey & Tufts, Ethics, Phil. Rev., 1934.

F.C. Sharp: Dewey & Tufts, Ethics, Ethics, 1933, Oct. No. 1.

E.T. Mitchell, Dewey's Theory of Valuation, Ethics, 1945, July, No. 1.

Dewitt H. Parker, Metaphysics of Value, Ethics, 1934, April, No. 3.

——, Value and Existence, Ethics, 1938, July, No. 4.

——, Human Values, Wahr, 1944.

——, R. Lepley's Verifiability of Values, 1946, Phil. Rev.

——, C.L. Stevenson's Ethics and Language, Phil. Rev., 1946.

——, Rejoinder to Mr. Lepley, Phil, Rev., 1946.

——, Reflections on the Crisis in Theory of Value 1, Ethics, 1946,

April, No. 3.

——, Discussion of John Dewey's "Some Questions About Value," Lepley's Co-operative Study, Columbia Univ. Press, 1949.

——, The Philosophy of Value, Univ. of Michigan, 1957.

Review:-

H.W. Wight, D.H. Parker's Human Values, Phil, Rev., 1933.

S. Hook, Human Values, Ethics, 1932, April, No. 3.

A.C. Garnett, D.H. Parker's The Philosophy of Value, Phil. Rev., 1959.

Frank C. Sharp, Ethics, Century Co., 1928.

——, The Ethics of Breach of Contract, Ethics, 1934, Oct., No. 1.

——, & P.G. Fox, "Caveat Emptor," Ethics, 1936, Jan., No. 2.

——, Ethical Empiricism and Moral Heteronomy: A Reply, Phil. Rev., 1941.

——, Voluntarism and Objectivity in Ethics, Phil. Rev. 1941.

——, Good Will and Ill Will, Univ. of Chicago, 1950.

Ralph B. Perry, General Theory of Value, Harvard Univ. Press, 1926.

——, Value as Election and Satisfaction, Ethics, 1931, July, No. 4.

——, Value and its Moving Appeal, Phil. Rev., 1932.

——, Religion versus Morality, According to the Elder H. James, Ethics, 1932, April.

——. Realms of Value, Harvard Univ. Press, 1954.

Review:-

Symposium on R.B. Perry's General Theory of Value, Ethics, 1930.

M. Farber, Perry's Realms of Value, Phil. & Phen. Rs, 1955, Vol. 15.

J. Kemp, Realms of Value, Phil. Q., 1956.

Clarence I. Lewis, An Analysis of Knowledge and Valuation, The Open Court Publishing Co., 1946.

——, The Meaning of Liberty, Revue Internationale de Philosophie, 1948.

——, Rational Imperative, Vision and Action, ed., by Sidney Ratner, 1953.

——, The Ground and Nature of the Right, Columbia Univ. Press, 1955.

——, Our Social Inheritance, Indiana Univ. Press, 1957.

Review:-

W.T. Stace, An Analysis of Knowledge and Valuation, Mind, Jan, 1948.

J.W. Robson, An Analysis of Knowledge and Valuation, Ethics, Jan, 1948.

C.J. Ducasse, An Analysis of Knowledge and Valuation, Phil. Rev., 1948.

P.W. Taylor, C.I. Lewis on Value and Fact, Phil. & Phen. Rs, Vol. 14, 1953.

R. Brandt, A Puzzle in Lewis' Theory of Memory, Phil. Studies, 1954.

M. Mothersill, C.I. Lewis: Hedonistic Ethics on a Kantian Model, Phil. Studies, 1954.

W.K. Frankena, C.I. Lewis's The Ground and Nature of the Right, Phil. Rev. 1957.

B. Morris, C.I. Lewis: Empiricist or Kantian ? Ethics, 1957, Apr.

Stephan C. Pepper, Values and Value Judgments, J. of Phil., 1949, July, 7.

——, Observations on Value From an Analysis of Simple Appetition, Lepley's Co-operative Study, Colmmbia, 1949.

——, Natural Norms in Ethics, J. of Phil., 1956, Jan. 5.

——, The Sources of Value, Univ., of California Press, 1958.

Review:-

R.B. Brandt, S.C. Pepper's The Sources of Value, Phil. Rev., 1959.

1b) ethical naturalism (ii)

Philip B. Rice, Objectivity in Value Judgements, J. of Phil., 1943, Jan. 7.

——, Quality and Value, J. of Phil., 1943, June, 24.

——, Types of Value Judgment, J. of Phil., 1943, Sept. 24.

"Public" and "Private" Factors in Valuation, Ethics, 1943, Oct., No. 1.

——, Definition in Value Theory, J. of Phil., 1947, Jan. 30, No. 3.

——, Science, Humanism, and the Good, Lepley's Co-operative Study, Columbia Univ., 1949.

——, Ethical Empiricism and Its Critics, Phil. Rev., 1953.

——, On the Knowledge of Good and Evil, Random House, 1955.

Review:-

L. Garvin, On the Knowldge of Good and Evil, Ethics, 1956, July.

Richard B. Brandt, An Emotional Theory of the Judgment of Moral Worth, Ethics, 1941, Oct. No. 1.

——, Moral Valuation, Ethics, 1946, Jan., No. 2.

——, The Emotive Theory of Ethics, Phil. Rev., 1950.

——, Stevenson's Defense of the Emotive Theory, Phil. Rev., 1950.

——, F.C. Sharp's Good Will and Ill Will, Phil. Rev. 1951.

——, The Status of Empirical Assertion Theories in Ethics, Mind, 1952. Oct., No. 244.

——, MacBeath's Experiments in Living, Phil. Rev., 1953.

——, Hopi Ethics, Chicago. 1954.

——, The Definition of an Ideal Observer's Theory in Ethics, Phil. & Phen Rs.. 1955, vol. 15.

——, Brandt, "Some Comments" on Prof. Firth's Reply, Phil. & Phen. Rs. 1. 1955, vol. 15.

——, A Stroll's The Emotive Theory of Ethics, Phil. Rev., 1956.

——, P.B. Rice on Ethical Theory, Phil. & Phen. Rs., 1957, Vol. 17.

——, Blameworth and Obligation, Essays in Moral Philosophy ed. by A.I. Melden, Univ. of Washington Press, 1958.

——, Ethical Theory, Prentice Hall, 1959.

——, Value and Obligation (Systematic Readings in Ethics), Harcourt, Brace & World, Inc., 1961.

Review:-

G.H. Sabine, R.B. Brandt's Hopi Ethics, Phil. Rev., 1956.

Paul Edwards, The Logic of Moral Discourse, Glencoe Ill, Free Press, 1955.

——, Hard and Soft Determinism, Determinism and Freedom, ed. by S. Hook, New York University Press, 1958.

Review:-

R. Handy, P. Edwards' The Logic of Moral Discourse, Phil & Phen. Rs. 1956.

L.G. Miller, P. Edwards' The Logic of Moral Discourse, Phil. Rev.,

1956.

R.G. Olson, P. Edwards' The Logic of Moral Discourse, Ethics, July, 1956.

Marcus G. Singer, McGreal's The Art of Making Choices, Phil. Rev., 1955.

——, On Duties to Oneself, Ethics, 1959, April, No. 3.

——, Moral Rules and Principles, Essays in Moral Phil., ed. by Melden.

——, Generalization in Ethics, Alfred A Knopf, 1961.

(2) anti-descriptivism

2a) anti-descriptivism (i)

Charles L. Stevenson, The Emotive Meaning of Ethical Terms, Mind, 1937, Jan., No. 181.

——, Ethical Judgments and Avoidability, Mind, 1938, Jan., No. 185.

——, Persuasive Definitions, Mind, 1938, July, No. 187.

——, M. Adler's A Dialectic of Morals, J. of Phil., 1942, Jan. 15.

——, Henry Lanz's In Quest of Morals, J. of Phil., 1942, Feb. 2.

——, Ethics and Language, New Haven, Yale Univ. Press, 1944.

——, Meaning: Descriptive and Emotive, Phil. Rev., 1948.

——, The Emotive Concept of Ethics and its Cognitive Implications, 1950, Phil. Rev.

——, Brandt's Questions about Emotive Ethics, Phil., Rev., 1950.

——, Ethical Analysis, Lecture Note, Spring Semester, 1960, Univ. of Michigan.

Review:-

H.D. Aiken, Stevenson's Ethics and Language, J. of Phil., 1945, Aug. 16, No. 17.

D.H. Parker, Stevenson's Ethics and Language, Phil. Rev., 1946.

E W. Hall, Stevenson on Disagreement in Attitude, Ethics, 1947, Oct.

R.B. Brandt's Stevenson's Defense of the Emotive Theory, Phil. Rev., 1950.

J. Kemp, Moral Attitudes and Moral Judgments, Phil. Q., 1951.

S.E. Levy, On the Tautologous Nature of Stevenson's Distinction

between Disagreement in Belief and Disagreement in Attitude, J. of Phil., 1952, March, 13, No. 6.

2b) anti-descriptivism (ii)

Henry D. Aiken, Emotive Meanings and Ethical Terms, J. of Phil., 1944, Aug., 17, No. 17.

——, Definitions of Value and the Moral Ideal, J. of Phil., 1945. June, 21, No. 13.

——, Reflections on Dewey's Questions about Value, Lepley's Co-operative Study, Columbia Univ. Press, 1949.

——, Evaluation and Obligation: Two Functions of Judgments in the Language of Conduct, J. of Phil., 1950, Jan. 5, No. 1.

——, A Pluralistic Analysis of the Ethical 'Ought', J. of Phil., 1951, Aug. 16, No. 16.

——, The Role of Convention in Ethics, J. of Phil., 1952, March, 13, No. 6.

——, The Authority of Moral Judgments, Peil-& Phen. Rs., 1952.

——, H.D. Aiken, Definitions, Factual Premisses and Ethical Conclusions, Phil. Rev., 1952.

——, The Levels of Moral Discourse, Ethics, 1952, July, No. 4.

——, The Spectrum of Value Predications, Phil. & Phen. Rs., 1953, Vol. 14.

——, Moral Reasoning, Ethics, 1953, Oct., No. 1.

——, The Ultimacy of Rightness in Richard Price's Ethics, Phil. & Phen. Rs., 1954, Vol. 14.

——, God and Evil: A Study of Some Relations between Faith and Morals, Ethics, 1958, Jan., No. 2.

Abraham I. Melden, On the Method of Ethics, J. of Phil., 1948, March, 25, No. 7.

——, Why be Moral ?, J. of Phil., 1948, Aug., 12, No. 17.

——, Two Comments on Utilitarianism, Phil, Rev., 1951.

——, Mayo's The Logic of Personality, Phil. Rev., 1953.

——, Action, Phil. Rev., 1956, Oct.

——, Essays in Moral Philosophy, Univ. of Washington Press, 1958.

——, Rights and Right Conduct, Basil Blackwell, 1959.

——, Free Action, Kegan Paul, 1961.

John Rawls, Outlines of A Decision Procedure for Ethics, Phil. Rev., 1951.

——, Two Concepts of Rules, Phil. Rev., 1955.

——, Justice as Fairness, Phil. Rev. 1958.

John Ladd, Value Judgments, Emotive Meaning, and Attitudes, J. of Phil., 1945, March, 3, No. 5.

——, Free Will and Voluntary Action, Phil. & Phen. Rs., 1952, Vol. 12.

——, Ethics and Explanation, J. of Phil., 1952, July, 17, No. 15.

——, Comments on Symposium: Utilitarianism and Moral Obligation, Phil. Rev., 1952.

——, The Structure of the Moral Codes of the Navaho Indian, Harvard Univ. Press, 1957.

——, The Grounds of Obligation, J. of Phil., 1956, Oct. 25.

P. Edwards, see Ethical Naturalism 1b.

(3) intuitionism

Charles A. Baylis, Intrinsic Goodness, Phil. & Phen. Rs., 1952, Vol. 12.

——, Comments on Symposium: Utilitarianism and Moral Obligation, Phil. Rev., 1952.

——, Grading, Values, and Choice, Mind, 1958, Oct.

——, Ethics, Henry Holt, 1958.

Review:-

N.J. Brown, Baylis' Ethics and Esthetics, Mind, Jan. 1961.

Lucius Garvin, Pleasure Theory in Ethics and Esthetics, J. of Phil, 1942, Jan. 15, No. 1.

——, Obligation and Moral Agency, Ethics, 1948, April, No. 3.

——, Normative Utilitarianism and Naturalism, Ethics, 1949, Oct., No. 1.

——, The New Rationalism in Ethics, J. of Phil., 1951, May 10, No. 10.

——, A Modern Introduction to Ethics, Boston, Houghton Mifflin, 1953.

Everett W. Hall, The Arbitrary in Ethics, J. of Phil., 1939, May 11.

——, What is Value?, The Humanities Press, 1952.

——, Practical Reason(s) and the Deadlock in Ethics, Mind, 1955, July, No. 255.

——, Further Words on 'Ought,' Phil. Studies, 1956.

——, Our Knowledge of Fact and Value, North Carolina Univ. Press, 1961.

E(lie) M. Adams, Word-Magic and Logical Analysis in the Field of Ethics, J. of Phil., 1950, May 25.

——, Nature of Ethical Inquiry, J. of Phil., 1951, Sept., 13.

——, Further Words on 'Ought,' Phil. Studies, 1956.

——, Cartesianism in Ethics, Phil. & Phen. Rs., 1956, Vol. 16.

——, 'Ought' again, Phil. Studies, 1957.

——, Ethical Naturalism and the Modern World-view, Charles Hill, 1960.

Maurice Mandelbaum, The Phenomenology of Moral Experience, Free Press, 1955.

(4) others:-

C.I. Lewis, see Ethical Naturalism.

Morton White, see Ethics in General.

J. Ladd, see 2b).

R.B. Brandt, see 1b).

Brand Blanshard, The Impasse in Ethics and A Way Out, Univ. of California Publication in Philosophy, Vol. 12, Nr. 2. 1955.

——, Reason and Goodness, George Allen and Unwin, 1961.

Abbrev.

Journal of Philosophy: J. of Phil.

Philosophical Quarterly: Phil. Q.

Philosophical Review: Phil. Rev.

Philosophical Studies: Phil. Studies,

Philosophy & Phenomenolosical Reseanch: Phil. & Phen. Rs.